

9

東松島市

官民連携による観光農園を中心とした移転元地の利活用の推進

ポイント



- ① 取組を地域に周知し、理解と協力を得るきっかけとなるシンポジウムを実施
- ② ワーキンググループで議論を重ね、取組の具体的な指針として「官民連携ビジョン」を作成

<令和3年度の実績>

- 移転元地の利活用に向けた今後の取組の「ロードマップ」を作成。
- まちづくりに造詣の深いコーディネーターを確保し、有志による勉強会を開催。ワーキンググループに発展。

<今年度（令和4年度）の実績>

- ワーキンググループ主体で、取組に関して地域住民へ理解と協力を得るための「シンポジウム」を開催。
- 地域住民等の意見を踏まえ、ワーキンググループによる検討を経て「官民連携ビジョン」を作成。

<今後の方向性>

- ワーキンググループから協議会に移行。これまでの官主導の体制から官民連携体制へ移行し、最終的には農業法人を立ち上げ、民間主導の運営体制を構築。
- 準備の出来たプレイヤーから、現地において順次取組に着手する。

所在地：宮城県東松島市

主な用途：地域特性を生かした持続運営できる観光農園、体験やチャレンジの場など

■ 位置図



1. 目的と背景

移転元地の有効活用に向け、市が描いた土地利用構想を実現するための『官民連携ビジョン』を作成する。

- ・ 特別名勝松島内の移転元地を含む約 25ha のエリアにおいて、土地活用がなされないまま外来種等雑草の繁茂や不法投棄などにより景観が損なわれている。
- ・ このような状況の解消とともに、地域活性化に資する地区の潜在力を活かすため、市では「令和の果樹の花里づくり」構想を描いた。
- ・ 構想の実現に向け、前年度に立ち上げた地元農業法人等で構成する勉強会をワーキンググループに発展させ、今後の取組の指針となる官民連携ビジョンを策定することとした。
- ・ エリアの一部において、梅の植樹やイチゴハウスの建設、土地造成などが先行的に行われている。



第Ⅰ期西側エリア
(梅園：R4年梅の実収穫)



第Ⅰ期西側エリア
(イチゴハウス：R5年2月オープン)



第Ⅰ期東側エリア
(旧かんぼの宿跡：造成工事中)

2. 想定された課題

ワーキンググループにおいてビジョンが検討されていく中で、以下の課題が想定された。

- ・ ビジョンを今後この場所で活動するプレイヤーの行動指針としてまとめ上げるため、**目標設定や理念、整備方針、ロードマップ等を整理する人材の確保**
- ・ 地域住民へ理解と協力を得る目的で開催される**取組（実証実験等）の実施と、取組成果を反映したビジョンの作成**

3. 今年度の取組項目

官民連携の長期的な活動であることと地域との調和の重要性を踏まえ、以下の取組を実施。

I ワーキンググループの運営

- ・ 本取組の指針となる官民連携ビジョンの作成に向けて、引き続きワーキンググループでの議論を深化

II 地域住民を巻き込んだイベント（シンポジウム）の実施

- ・ 地域住民へ構想を周知し、理解と協力を得るためのシンポジウムを実施

III 官民連携ビジョンの取りまとめ

- ・ 民間コンサルタントの知見を活かし、今後の官民連携の取組の指針となるようなコンテンツや見せ方を精査

4. 取組経過や主な調整プロセス

6～10月 今年度の取組予定及び体制を確認し、到達目標を設定

- ▶ 市担当課との打ち合わせにより、今年度実施予定のワーキンググループ、先進事例視察、実証実験、推進体制について確認。
- ▶ 今年度の到達目標として、**官民連携ビジョンの作成と、ビジョン実現につながる実証実験の実施を共通認識**として設定。
- ▶ ワーキンググループを随時開催し、取組のコンセプトや将来像について検討。

ポイント①

取組を地域に周知し、理解と協力を得るきっかけとなるシンポジウムを実施

10～12月 ワーキンググループの活動をとおり、地域住民を交えたシンポジウムの開催と、『官民連携ビジョン』の素案を作成

- ▶ 予定していた先進地の視察は、新型コロナの影響等を考慮して中止し、また実証実験は現地の梅の収穫状況を勘察して、シンポジウム形式に変更して実施。
- ▶ シンポジウムでは、地域住民とワーキンググループメンバーが活発に意見を交わすことで構想を周知するとともに、今後の活動に対する理解と協力を得るきっかけとなった。※p9-4 図2 参照
- ▶ ワーキンググループで検討を重ね、『官民連携ビジョン』の素案を作成。



ワーキンググループ

12～2月 『官民連携ビジョン』のとりまとめと、次年度の体制づくり

- ▶ 素案をもとにした『官民連携ビジョン』のとりまとめ支援（作業は(株)地域環境計画に委託）。※p9-4 図2 参照
- ▶ ワーキンググループは今年度をもって発展的に解消することとなり、来年度に協議会に移行するための準備を進めている。

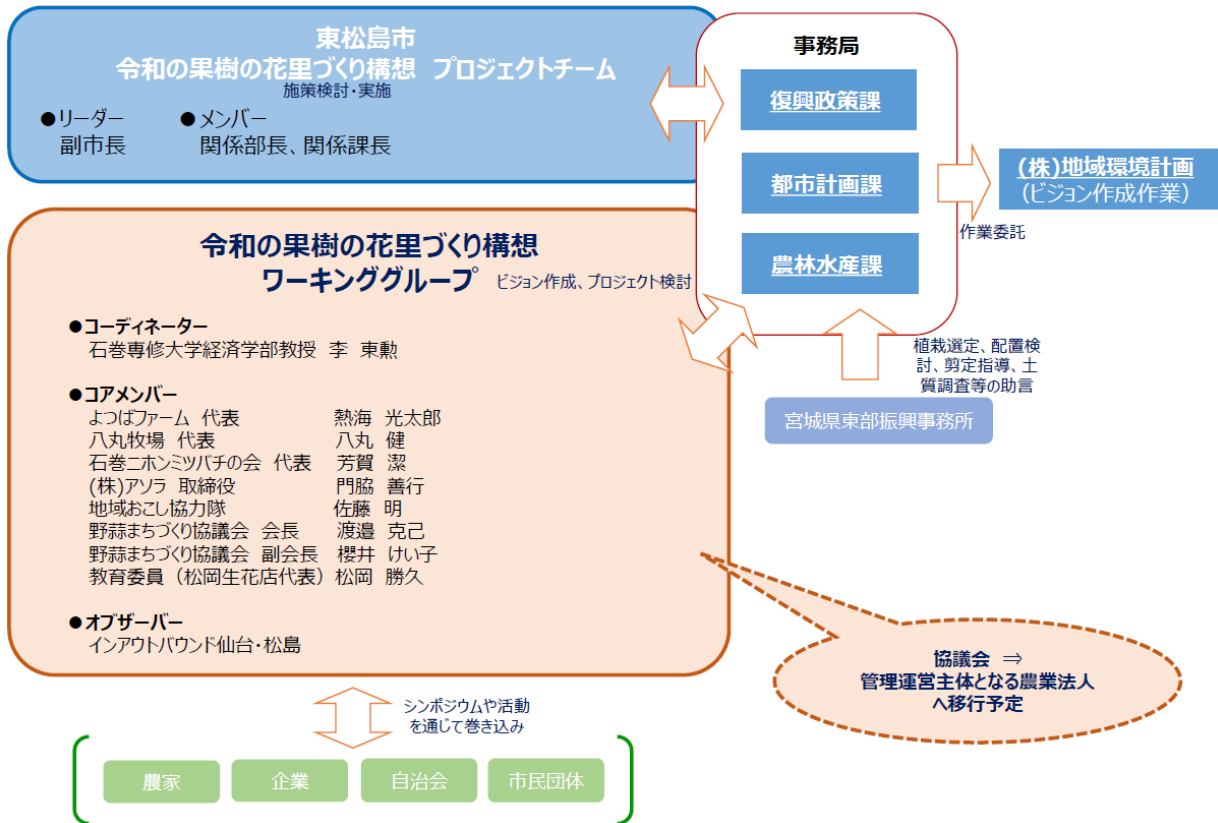
ポイント②

ワーキンググループで議論を重ね、取組の具体的な指針として「官民連携ビジョン」を作成

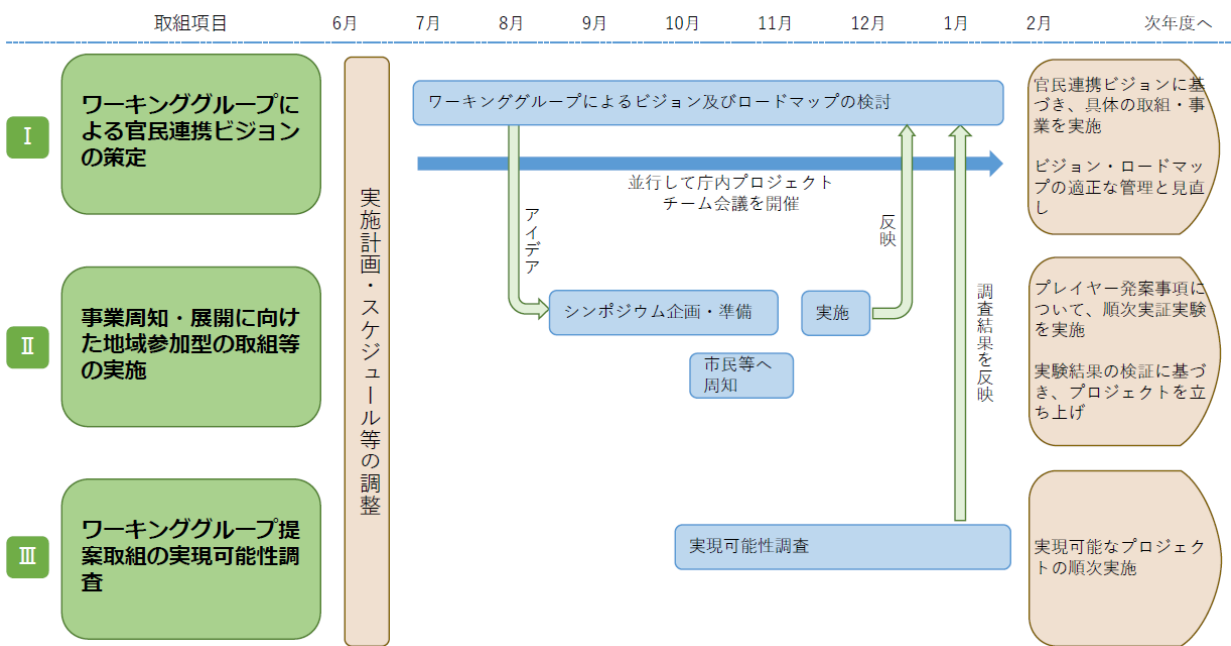
■ 「ワーキンググループ」開催と今後の実施体制

東松島市役所内に、令和の果樹の花里づくり構想プロジェクトチームを設置。市復興政策部復興政策課及び都市計画課、産業部農林水産課が事務局となり、関係各部署と庁内調整を実施。

- ・ 官民連携のプラットフォームとなるワーキンググループには、石巻専修大学経営学部 李東勲教授をコーディネーターに、よつばファーム、あそら等の地元農業法人、地域おこし協力隊、まちづくり協議会等が参画。(株)地域環境計画が作業支援する形でビジョンを作成。
- ・ R5年度以降は、ワーキンググループのプレイヤーを中心に協議会へ移行し、将来的に農業法人化を目指す。



■ 取組工程



■ 取組成果や重要な検討資料等



図1 ワーキンググループ検討資料 (左)
 現地確認 (右)

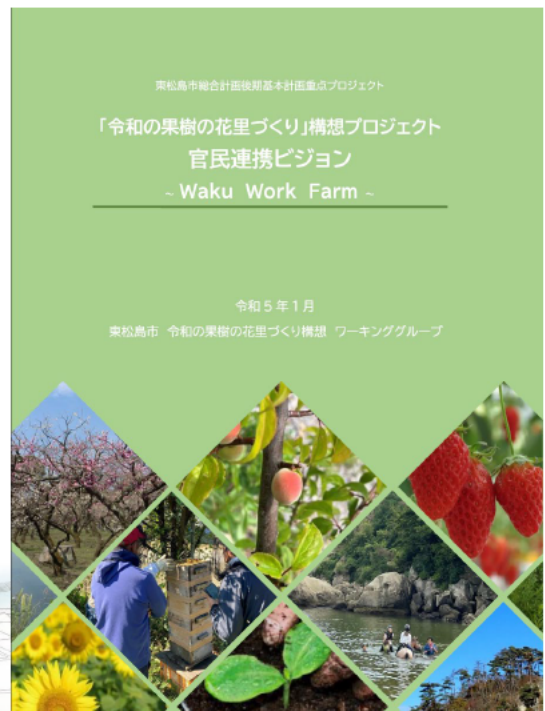


図2 シンポジウム風景 (左上) 『官民連携ビジョン』 (右上・下)

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

5. 今年度の取組成果

成果1 ワーキンググループが主体となり、地域への周知と理解・協力を得るきっかけとなる『シンポジウム』を開催

- ▶ 当該地区の取組について地域住民に周知を図り、理解と協力を得ることを目的としたシンポジウムを開催。
- ▶ シンポジウムでは、地元の農業経験者等から、当該構想に対する様々なアイデアやアドバイスが寄せられた。

成果2 ワーキンググループによる議論を重ね、今後の取組を進めるための指標となる『官民連携ビジョン』を作成

- ▶ ワーキンググループにより、取組のコンセプトや基本理念について議論し、官民連携ビジョンの素案を作成した。
- ▶ 当ビジョンは、実際のプロジェクトを担うプレイヤーと取組内容を明確に示すことで、実効性を持たせた。

6. 今後の方向性

これまでの官主導の取組から官民連携体制へ移行し、将来的に民間主導で推進

- ・ R4年度までは、市主導でワーキンググループの運営やビジョン作成を実施してきたが、R5年度に協議会を立ち上げて官民連携体制に移行し、将来的には農業法人化して民間主導で推進。
- ・ 現在の活動メンバーに加え、新たに地元農業法人や地域住民等のプレイヤーを巻き込み、実験的な取組と検証を重ねながら段階的に整備。

中長期スケジュール・フロー図等

農園全体	R元	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10				R20				R30
フェーズ		フェーズ1			フェーズ2			フェーズ3										
活動エリア		I期エリア			II期エリア			III期エリア										
移転元地の活用構想		●令和の果樹の花見づくり構想																
官民連携プロジェクト (WakuWorkFarm)		●協議会 ●WG ●協議会設置						●農業法人設立										
市民説明会など		●シンポジウム																

エリア内プロジェクト I期エリア	R元	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10				R20				R30
フェーズ		フェーズ1			フェーズ2			フェーズ3										
活動エリア		I期エリア			II期エリア			III期エリア										
基礎工事		■			■			■										
苗木1：農地に適したまづくり		■			■			■										
苗木2：バーマカルチャーの実践		■			■			■										
苗木3：馬とのふれあい・馬糞体験		■			■			■										
苗木4：ニホンミツバチの養蜂		■			■			■										
苗木5：イチゴの栽培・収穫体験		■			■			■										
苗木6：エディブルフォレスト		■			■			■										
苗木7：農園産食材の活用		■			■			■										
苗木8：子ども創造ゾーン		■			■			■										
苗木9：コミュニティ・スクールでの授業		■			■			■										
梅園		■			■			■										
その他の農地		■			■			■										

7. 取組主体・関係者の声

これまでの状況や今回の取り組みにおける工夫や苦労など

- ・ 昨年度に引き続き本事業の支援を採択いただいたことで、有識者を交えた構想策定のワーキンググループでの議論を継続的に行うことができた。

ハンズオン支援事業で今回取組んだ感想など

- ・ 今年度の取組によって、事業目的や目指すべき方向性が明確になり、今後取組むべき内容や参画するメンバーの役割について一定の方向性が示された。
- ・ 次年度から管理運営主体を核とした本格的な農園づくりを進めていくにあたって、外部から補助金等の資金的な支援を得る際などにも事業の目的や必要性を整理しやすくなったと考える。



東松島市 都市計画課 森課長